

《担当者名》 飯泉智子 柳田早織

【概要】

本演習では、運動障害性構音障害、器質性構音障害（舌切除）、および音声障害に関する評価方法、訓練方法の実際を学ぶ。また、評価に基づいた訓練方針の考え方を修得する。

【学修目標】

各障害の評価方法、訓練方法の基本的な手技を修得する。検査結果を統合し解釈できる。

1. ことばの音の問題をもつ人の発声発語器官の運動特徴を抽出し、それを記述できる。
2. ことばの音の資料の適切な収集と、基本的な音響分析方法を実施する。
3. 声の聴覚印象をGRBAS尺度を用いて評価する。
4. 発話明瞭度の評価を実施できる。
5. 症例の観察結果を基に評価のまとめられる。
6. 発声発語の基本的治療手技を実践できる。
7. 発声発語訓練のプログラムを作成できる。
8. 発声発語に関する空気力学的計測の原理と測定を知り、結果を解釈する。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	オリエンテーション	評価報告書およびケース・レポートの記述について学ぶ。 ICFを用いた臨床的思考の有用性を考える。 問題指向型学習の実施方法を理解する。	飯泉智子
2	評価、訓練の概要	情報収集 発声発語機能の評価の概要 リハビリテーションの流れ 実施上の留意点	飯泉智子
3 }	運動障害性構音障害	主な検査の目的と実施手順	飯泉智子
4			
5 }	運動障害性構音障害	下位脳神経の検査	飯泉智子
6			
7 }	運動障害性構音障害	発声発語器官の機能検査	飯泉智子
8			
9 }	運動障害性構音障害	聴覚的印象による評価	飯泉智子
12			
13 }	運動障害性構音障害	機能訓練	飯泉智子
16			
17 }	運動障害性構音障害	発話速度の調節法 言語音の明瞭化に関する訓練	飯泉智子
18			
19 }	運動障害性構音障害	グループワーク 課題：評価結果のまとめ、訓練方針、訓練プログラムを立案し報告書を作成する。	飯泉智子
20			
21 }	器質性構音障害	口腔・中咽頭がん術後患者の発話評価	飯泉智子
22			

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
23) 24	音声障害	聴覚心理的評価と音響分析	柳田早織
25) 27	音声障害	空気力学的評価・生理的声域の測定	柳田早織
28) 30	音声障害	音声治療	柳田早織

【授業実施形態】

遠隔授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

課題100%

【教科書】

日本音声言語医学会 編 「新編 声の検査法」 医歯薬出版株式会社 2009年

【参考書】

熊倉勇美 編著 「言語聴覚療法シリーズ9 改訂運動障害性構音障害」 建帛社 2009年
Raphael, L. J. 他 著、廣瀬肇 訳 「新ことばの科学入門 第2版」 医学書院 2010年
熊倉勇美 他 編 「標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第2版」 医学書院 2015年
廣瀬肇 他 著 「言語聴覚士のための運動障害性構音障害」 医歯薬出版 2011年
舘村卓 著 「口蓋帆・咽頭閉鎖不全 その病理・診断・治療」 医歯薬出版 2012年
溝尻源太郎 他 編著 「口腔・中咽頭がんのリハビリテーション 構音障害、摂食・嚥下障害」 医歯薬出版 2000年
リチャード・ミラー 著、岸本宏子 他 訳 「歌い手と教師のための手引書 上手に歌うためのQ & A」 音楽之友社 2009年
小池靖夫 編 「音声治療学 音声障害の診断と治療」 金原出版 1999年
目崎高広 他 著 「ジストニアとボツリヌス治療 改訂第2版」 診断と治療社 2005年
梶龍兒 編 「不随意運動の診断と治療 動画で学べる神経疾患 改訂第2版」 診断と治療社 2016年
椿原彰夫 編著 「PT・OT・ST・ナースを目指す人のためのリハビリテーション総論 要点整理と用語解説 改訂第2版」 診断と治療社 2011年
障害者福祉研究会 編 「ICF 国際生活機能分類 - 国際障害分類改定版 - 」 中央法規出版 2002年
平野実 編 「呼吸・嚥下・発声の制御」 篠原出版 1982年
小林武夫 編 「痙攣性発声障害 そのメカニズムと治療の現状 改訂新版」 時空出版 2005年
廣瀬肇 著 「音声障害の臨床」 インテルナ出版 1998年
城本修 他 著 「STのための音声障害診療マニュアル」 インテルナ出版 2008年
Behrman, A. 他 編、城本修 他 訳 「実践音声治療マニュアル」 インテルナ出版 2012年

【備考】

演習の授業は臨床的態度、評価、治療手技の習得の場であり、毎回、必ず出席することを前提としている。やむを得ず欠席する場合は、担当教員のメールアドレス宛てに事前に連絡し、対応方法について指示を受けること。

音声、画像などの特殊教材を多用するので、受講方法に関する指示をよく確認すること。

成人発声発語障害学で使用した教科書、配付資料等を持参すること。

担当者連絡先

飯泉智子：i-zumi@hoku-iryo-u.ac.jp

柳田早織：s.yanagi@hoku-iryo-u.ac.jp

【学修の準備】

成人発声発語障害学で使用した教科書、配付資料等をよく復習すること。（20分）

科学的文章作成能力の向上に努めること。（20分）

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

（DP4）リハビリテーション専門職として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、適切に対処できる実践的能力を身につけます。

【実務経験】

飯泉智子（言語聴覚士）、柳田早織（言語聴覚士）

【実務経験を活かした教育内容】

医療機関での実務経験を活かし、発声発語器官の問題によるコミュニケーション障害に対するリハビリテーションの基本的知識の活用、評価および治療等に要する技術の習得を指導する。